

福岡市
井相田C遺跡 第5次
高畠遺跡 第14次

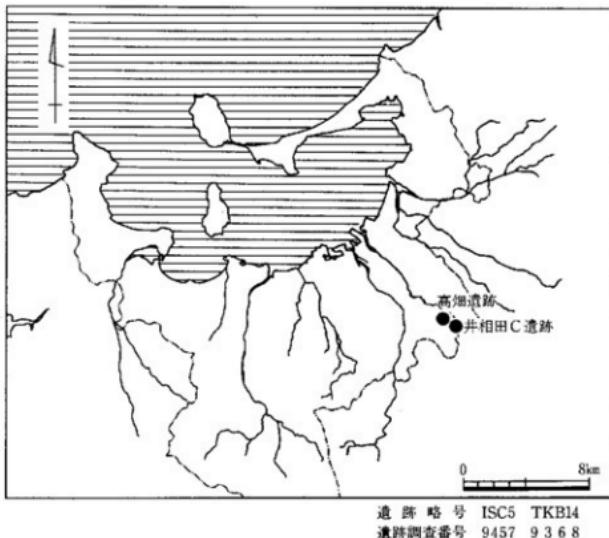
福岡市埋蔵文化財調査報告書第458集

1996

福岡市教育委員会

福岡市
い そ う だ
井相田C遺跡 第5次
たか ばたけ
高 畑 遺 跡 第14次

福岡市埋蔵文化財調査報告書第458集



1996

福岡市教育委員会

序

福岡市は古くより大陸との交流の場としての役割を果たし、大陸よりもたらされた豊かな文化財が眠る街として知られています。近代都市として今なお膨張を続ける福岡市の中なかで、都市化と文化財の保護を両立させ、両者が共存する歴史豊かな住みよい街づくりをめざし、これを後の世に伝えていくことが、現代に生きる我々の務めであるといえます。

福岡市教育委員会では、これらの埋蔵文化財を保護するとともに、開発によって破壊される場合には事前に発掘調査を行い、記録の保存に努めています。本書は住宅ビル建設にともなって実施した井相田C遺跡第5次調査、並びに高畠遺跡第14次調査の成果について報告するものです。

調査に際し、快くご理解とご協力を頂いた村上義友氏、中村建設株式会社をはじめ、調査に関係された方々に対し、深く感謝を申し上げるとともに、この報告書が地域の皆様に幅広く活用され、文化財保護のご理解を深める一助とならんことを願います。

平成8年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 尾花剛

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が行った、博多区井相田2-8-3所在の井相田C遺跡第5次調査、ならびに博多区板付5-8-4所在の高畠遺跡第14次調査の報告書である。
2. 井相田C遺跡第5次調査は、将来的に遺跡名・調査次数についての変更があり得る。(詳しくはII章を参照)
3. 発掘調査は、民間宅地開発に伴う事前調査として実施した。発掘調査の担当者は、井相田C遺跡第5次調査が吉武学、高畠遺跡第14次調査が佐藤一郎である。
4. 調査で検出した遺構は、遺構の性格を示す記号としてSB(掘立柱建物)、SD(溝、河川)、SK(土坑)を付し、これに遺構の種別を問わずに発見順に与えた連番号を付けて表記した。
5. 本書に使用した図の作製は吉武学、佐藤一郎(福岡市教育委員会)、今泉博子、平田こずえが行った。
6. 本書に使用した図の製図は吉武、佐藤、田中克子(整理調査員)、西村晴香が行った。
7. 本書に使用した写真的撮影は各担当者が行った。
8. 本書に使用した方位は全て磁北である。
9. 本書の執筆は各担当者が行った。
10. 本書の編集は、佐藤と協議のうえ、吉武が行った。
11. 本報告書に関する記録と遺物類は、整理後、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、ここで管理する。

井相田C遺跡第5次

遺跡調査番号	9 4 5 7		遺跡略号	ISC5
調査地地籍	博多区井相田2-8-3		分布地図番号	
開発面積	2,960m ²	調査対象面積	1,080m ²	調査面積
調査期間	1995年(平成7年)1月9日～3月3日			

高畠遺跡第14次

遺跡調査番号	9 3 6 8		遺跡略号	TKB14
調査地地籍	博多区板付5-8-4		分布地図番号	
開発面積	400m ²	調査対象面積	400m ²	調査面積
調査期間	1994年(平成6年)3月14日～3月31日			

本文目次

井相田C遺跡第5次調査の記録

I.はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
II. 遺跡の位置と環境	1
III. 調査の記録	2
1. 調査の概要	2
2. 古墳時代前期の遺構と遺物	5
3. 古墳時代後期の遺構と遺物	8
4. 古代・中世の遺構と遺物	9
(1)掘立柱建物	9
(2)溝・河川	9
(3)土坑	11
IV. 小結	12

高畠遺跡第14次調査の記録

I.はじめに	13
1 調査にいたる経過	13
2 調査の組織	13
II. 遺跡の位置と環境	13
III. 発掘調査の概要	17
IV. 遺構と遺物	17
1 検出遺構	17
2 出土遺物	17

挿図目次

Fig. 1 井相田C遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)	3
Fig. 2 井相田C遺跡第5次調査区位置図 (1/3,000)	3
Fig. 3 井相田C遺跡第5次検出遺構配置図 (1/200)	4
Fig. 4 SD-03・05土層断面図 (1/40)	6
Fig. 5 SD-03出土遺物実測図 (1/3)	7
Fig. 6 SD-05出土遺物実測図 (1/3)	7
Fig. 7 SD-02・19土層断面図 (1/40)	8
Fig. 8 SD-02・12・19出土遺物実測図 (1/3)	9

Fig. 9	SB-30実測図 (1/40)	10
Fig.10	SD-10・23・24出土遺物実測図 (1/3)	11
Fig.11	SK-08実測図 (1/60)	12
Fig.12	SK-08出土遺物実測図 (1/3)	12
Fig.13	遺跡の位置と周辺の遺跡	14
Fig.14	高畠遺跡および周辺遺跡調査地点位置図	16
Fig.15	高畠遺跡第14次調査周辺地形図 (1/500)	18
Fig.16	高畠遺跡第14次調査構造配置図 (1/125)	19
Fig.17	溝土層断面実測図 (1/4)	20
Fig.18	出土遺物実測図 (1/4)	20

図 版 目 次

- PL. 1 1. 井相田C遺跡第5次調査区全景(南から) 2. 井相田C遺跡第5次調査区全景(西から)
- PL. 2 1. SD-03 (北西から) 2. SD-05 (北西から)
3. SD-02 (北から) 4. SD-02 (南から)
5. SD-02 (南東から) 6. SB-30 (南東から)
7. SB-30 (南から)
- PL. 3 井相田C遺跡第5次調査出土遺物・I
- PL. 4 井相田C遺跡第5次調査出土遺物・II
- PL. 5 (1) 高畠遺跡第14次調査全景 (南から)
(2) SD10・11溝土層 (東から)
(3) SD08溝土層 (東から)
- PL. 6 (1) SD07溝土層 (東から)
(2) 出土遺物

井相田C遺跡第5次調査の記録

I. はじめに

1. 調査に至る経過

平成6年6月、福岡市博多区井相田2丁目8-3の一部で、村上義友氏によって共同住宅ビル建設が計画され、28日に福岡市教育委員会埋蔵文化財課に事前審査願が提出された。同地区は福岡市文化財分布地図上では古代の官衙跡と推定される井相田C遺跡群の範囲に含まれていたため、両者で協議を行い、平成6年12月7日に稲刈りを待って試掘調査を実施した。その結果、地表下80cmで溝、杭列、河川を検出し、古墳時代から古代・中世にわたる集落跡、水田跡の存在が明らかとなつた。埋蔵文化財課では遺跡の保存を考え、設計変更を含めて協議を重ね、盛土を施してもなお破壊を受ける範囲について記録保存のための発掘調査を実施することで合意に至つた。同地区内には4層、2層の2棟の建物と駐車場等の付帯設備が計画されていたが、このうち地下に影響を与える4層建物の建築敷地内のみを調査対象とした。

発掘調査は福岡市教育委員会埋蔵文化財課が受託調査として行い、平成7年1月9日～同年3月3日に発掘調査を、平成7年度に整理報告書作製を行つた。

2. 調査の組織

調査委託 村上義友

調査主体 福岡市教育委員会 教育長 尾花 明

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾 學（前）、荒巻輝勝（現）

埋蔵文化財第2係長 山崎純男（前）、山口譲治（現）

調査庶務 埋蔵文化財第1係 西田結香

調査担当 埋蔵文化財第2係 山口譲治、菅波正人（試掘担当）

埋蔵文化財第2係 吉武 学（調査担当）

調査作業 石屋一、金沢春雄、金子國雄、熊本義徳、渋谷博之、高崎秀巳、高田勘四郎、

高田歎、西田昭、二宮白人、萩尾行雄、藤田圭三、松原高博、森垣隆視、森本勇夫、

米倉國弘、金子澄子、唐島栄子、境フジ子、酒井康恵、杉村百合子

整理調査員 田中克子

整理作業 安部国恵、有島美江、井澤早苗、大神真理子、太田富美子、富田輝子、西村晴香、宮坂環

II. 遺跡の位置と環境

井相田C遺跡は福岡平野の東部に位置し、御笠川中流域の沖積微高地上に立地している。現在の行政区画では福岡市南東部にあって大野城市との境に接する。

今回の調査は井相田C遺跡第5次調査の名称で実施したが、井相田C遺跡の範囲と調査次数には混亂が見られており、その経過を以下に述べておく。

1981年刊行の福岡市文化財分布地図（東部1）では井相田C遺跡の存在は知られておらず、大野城

市との市境に位置する遺跡を福岡市側でも仲島遺跡と呼んでおり、1978～1984年の間に福岡市教育委員会によって1～3次の調査が実施されている。その後、仲島遺跡の西側に新たな遺跡が発見され、これを井相田C遺跡と呼称して後、先行して調査された仲島遺跡の調査報告書が未刊のためもあって、埋蔵文化財課窓口の分布地図などで両遺跡の範囲についての統一認識がなくなってしまい、その結果、1996年刊行の福岡市文化財分布地図（東部1）では福岡市教育委員会調査の仲島遺跡1、2次調査までが井相田C遺跡に含まれており、仲島遺跡3次調査地点のみが仲島遺跡の呼称のまま別の遺跡として残されている。この改訂版の分布地図に従えば、仲島遺跡1次調査→井相田C遺跡1次調査、仲島遺跡2次調査→井相田C遺跡2次調査、井相田C遺跡1次調査→井相田C遺跡3次調査、井相田C遺跡2次調査→井相田C遺跡4次調査、井相田C遺跡3次調査→井相田C遺跡5次調査となり、今回の調査は井相田C遺跡の6次調査ということになる。しかし、文化庁提出書類等を含め記録類の一切を当初の名称で登録しており、混乱を避けるため、今回の調査については井相田C遺跡5次調査のままで報告書を刊行することとしたが、将来的には遺跡名、調査次数の変更があり得ることを明記しておく。

上記したように、現在までに、福岡市側の仲島遺跡で3次、井相田C遺跡で3次の調査が行われており、大野城市側の仲島遺跡でも同市教育委員会による調査が重ねられており、この遺跡が弥生時代初頭から近世までに及ぶ広大な遺跡であることが明らかとなっている。

井相田C遺跡では、弥生時代前期の竪穴住居跡、土坑、古墳時代後期の竪穴住居跡、掘立柱建物、溝、古代の掘立柱建物、竪穴住居跡、井戸、土塙墓、炉、土坑、大溝、溝、柵列、烟状遺構、および鎌倉時代の土塙墓、室町時代後期の池を中心とする水田跡等を検出している。出土遺物には、人面墨書き土器、墨書き土器などがある。古代の集落は、8世紀後半を主体とし、8世紀前半から10世紀初頭にまで及んでおり、集落が南から北へ移動しながら拡大している状況が確認されており、遺構・遺物の内容から、何らかの公的施設ではないかと見られている。

仲島遺跡では、発掘調査の成果によって、弥生時代中期前半から古墳時代を経て、奈良時代、間をあけて鎌倉時代にいたる複合遺跡であることが判明している。その中で注目すべき遺構・遺物をあげると、王莽銭（貨布）、銅鑄、後漢鏡片、青銅製勧先、銅矛鋒型、滑石製模造品（子持ち勾玉など）、人面墨書き土器、奈良時代の木組みの井戸、鎌倉時代の漁獲施設（築）などがある。

III. 調査の記録

1. 調査の概要

既に述べたように、建物建設予定地のうち遺跡の破壊を回避できない東側の幅約18mの部分について発掘調査を行った。調査区は南北に長く設けたが、南側は河川となることが試掘調査で確認されていたため、約6mの引きを取った。調査区は東西幅18m、東辺53m、西辺47mを測る。

調査地の現況は水田で、地表下80cmで遺構面となるが、水田造成時に削平を受けており、なおかつ各時代の搅乱溝・坑が多数見受けられる。検出遺構は時代別に以下のとおりである。

古墳時代前期 溝2

古墳時代後期 溝3

古代・中世 掘立柱建物1、溝2、土坑1、河川1、水田跡

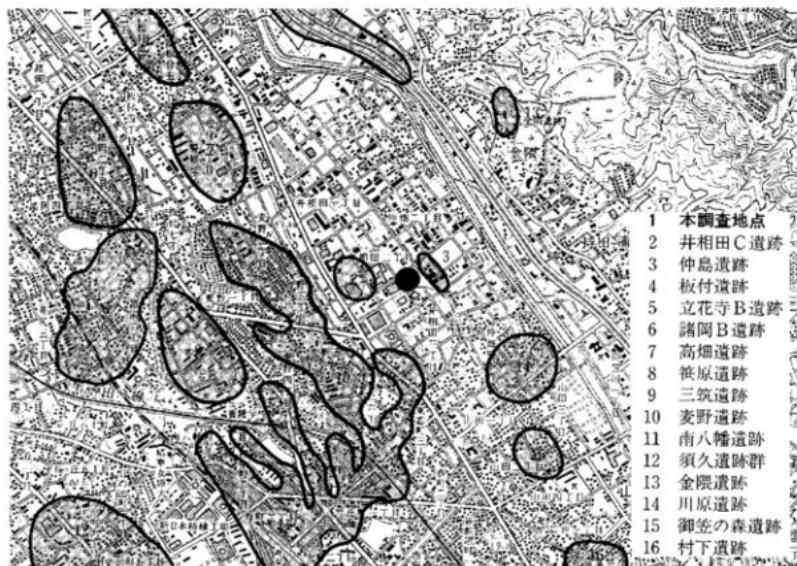


Fig. 1 井相田C遺跡周辺遺跡分布図 (1/25,000)



Fig. 2 井相田C遺跡第5次調査区位置図 (1/3,000)

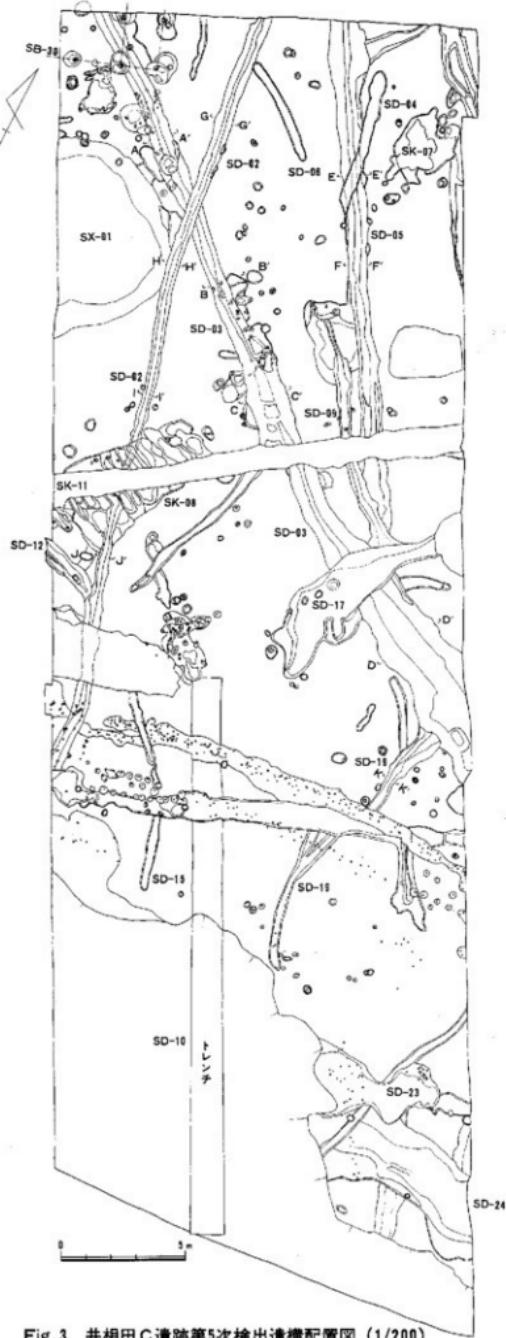


Fig. 3 井相田C遺跡第5次検出遺構配置図 (1/200)

古墳時代前期の遺構である溝SD-03にはその両岸に水田への給排水のための施設と考えられる窪みが4ヶ所に取りついており、灌漑用水路とみて間違いないであろう。他の古墳時代前期の溝SD-05や、同後期の溝3条についても給排水施設は見られないものの、同様の性格が考えられる。掘立柱建物からは出土遺物がなく時期を決めがたいが、周辺の調査状況から考えれば古代のものである可能性が高い。また、古代の土坑SK-08は粘土採掘坑と見られる。中世の遺構には調査区の南端で検出された河川SD-10と、この河川に流入する小さな流路、及び足跡のみ残された水田面がある。以上のことから、当地は古墳時代には水田、古代には集落のへり、中世には再び水田となったと見られる。

出土遺物はコンテナにして約5箱分であり、弥生時代、古墳時代、古代、中世の遺物がある。特記すべき遺物としては、中世河川に流れ込んだ状態で出土した木簡2点がある。うち1点にはかすかに墨痕が認められるが、文字は判読できない。

2. 古墳時代前期の遺構と遺物

SD-03 Fig. 4, PL. 2

調査区北西隅から出て、調査区東辺の中央へと流れる細い溝である。北端では幅0.85m、深さ0.3mを測るが、南に大きく、南端部で幅2.3m、深さ0.65mとなる。北側では古墳時代後期の溝SD-02、古代の掘立柱建物SB-30に切られている。南側では、溝SD-19との切り合い関係を確認できず、同時に掘削したが、SD-19からは古墳時代後期の遺物が出土している。SD-03の覆土は、最下層に砂、中層に粘質土、上層に砂質土が堆積している。溝の北よりに偏して、溝に取りつく浅い張出し状の窪みが4ヶ所に見られる。窪みの深さはいずれも0.1mに満たず、覆土は全て砂であった。窪みは東岸にひとつ、西岸に3つあり、溝SD-03から溝の東西に存在したと見られる水田へ水を給排するためのものと考えられる。なお、水田の痕跡を示す畦畔などの遺構は溝の周囲には検出できなかった。

SD-03出土遺物 Fig. 5, PL. 3

付帯設備である窪みからの出土品をあわせ、弥生土器・土師器が207点、須恵器が5点出土した。SD-03は他遺構との切り合いが激しく、須恵器は調査時にこれらから混入したものと考えられる。

1～3は弥生土器である。1は「く」字形口縁の甕形土器の小片である。淡灰黄色を呈し、胎土には多量の砂粒と少量の雲母を含み、焼成は良好である。2・3は甕形土器の底部片である。2は平底で、器面が剥落しており調整は不明である。淡灰褐色を呈し、胎土には砂粒・雲母を含み、焼成はやや不良。底径は9.8cmを測る。3は裾が外へ開く分厚い底部である。外面には継位の刷毛目が認められるが、内面は器面がはげ落ちている。橙～淡橙褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良い。底径は8.2cmを測る。

4～11は土師器である。4～6は甕形土器の口縁部片である。ともに頸部で屈曲して外へ開くものである。4は肩部に刷毛目が残る他はローリングのため調整不明である。淡橙～淡橙褐色を呈し、砂粒・雲母を多量に含み、焼成は良好である。口径17.6cm。5は器面があれており調整は不明。淡橙～淡橙褐色を呈し、砂粒を少量含み、焼成は良い。小片の為不正確ながら口径は15cm。6は口縁内外に刷毛目を施し、胴部内面をヘラ削りしている。淡橙褐色を呈し、細砂粒を多量に含み、焼成は良好。7、8は高壺の脚部である。7は外面を刷毛目の後ナデ調整、内面をヘラ削りの後ナデ調整する。橙～橙褐色を呈し、胎土に砂粒を少量含み、焼成は不良で、底径は12.4cmを測る。8は器面が剥落しているが、内面にヘラ削りの痕跡が認められる。淡黄色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好である。9～11は小形丸底壺である。9は胴部内面を指もしくはヘラ先で整形し、胴部外面は上半を刷毛目、下半を

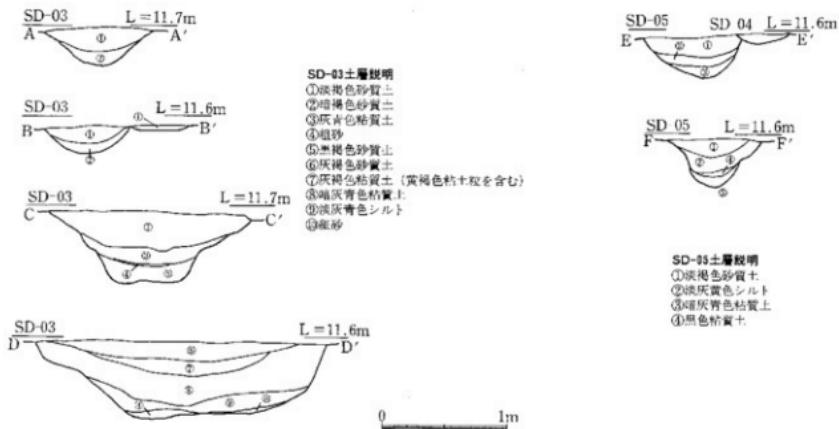


Fig. 4 SD-03・05土層断面図 (1/40)

ナデ調整し、最後に口縁内外を横ナデする。淡橙褐色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。10は胴部内面をヘラ整形、外面をナデ調整し、口縁内外を横ナデして仕上げる。淡橙褐色を呈し、胎土に砂粒を含み、焼成は良好。口径7.2cm、器高7.9cmを測る。11はやや大ぶりで、胴部が重く。胴部内面は荒いヘラ削り、外面は刷毛目調整、口縁内外を横ナデ調整する。淡橙～淡橙灰色を呈し、胎土は精良で、焼成は良く、胴部外面に黒斑がある。口径8.5cm、器高13.2cmを測る。

12、13は須恵器變形土器である。12は口縁部片で、外面に横位の沈線と櫛描き波状文を各2条施す。外面が灰黒色、内面が緑青色を呈し、胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好で、内面に自然釉がかかる。13は胴部片で、外面格子叩き、内面には同心円文のアテ具痕が残る。灰青色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好である。2点の須恵器は他遺構からの混入品である。

SD-05 Fig. 4, PL. 2

SD-03の東側に検出したSD-03よりも東寄りに軸を取る溝である。南流し南端でSD-03によつかるが、合流点が時期不明の溝SD-09、17に切られており、SD-03と同時期かどうか判断できない。幅0.8m、深さ0.3~0.4mを測る断面J字形の溝で、粘質土、シルト、砂質土の順に堆積して埋没している。SD-03で見られた給排水施設は検出できなかった。

SD-05出土遺物 Fig. 6

弥生土器、土師器片が78点出土した。

14~17は弥生時代の變形土器底部片である。磨滅が著しく調整手法は不明である。ともに平底で、概ね橙色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成が不良である。18は土師器の變形土器である。器面は剥落しているが胴部内面にはヘラ削りの痕跡が認められる。外面淡黄色、内面灰～灰褐色を呈し、砂粒を多量に含み、焼成はやや不良である。口径15.9cmを測る。19は土師器の甕もしくは鉢形土器であろう。胴部内面をヘラ削り調整する。淡橙色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良である。20は高環もしくは鉢の脚か。淡黄～褐色を呈し、胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

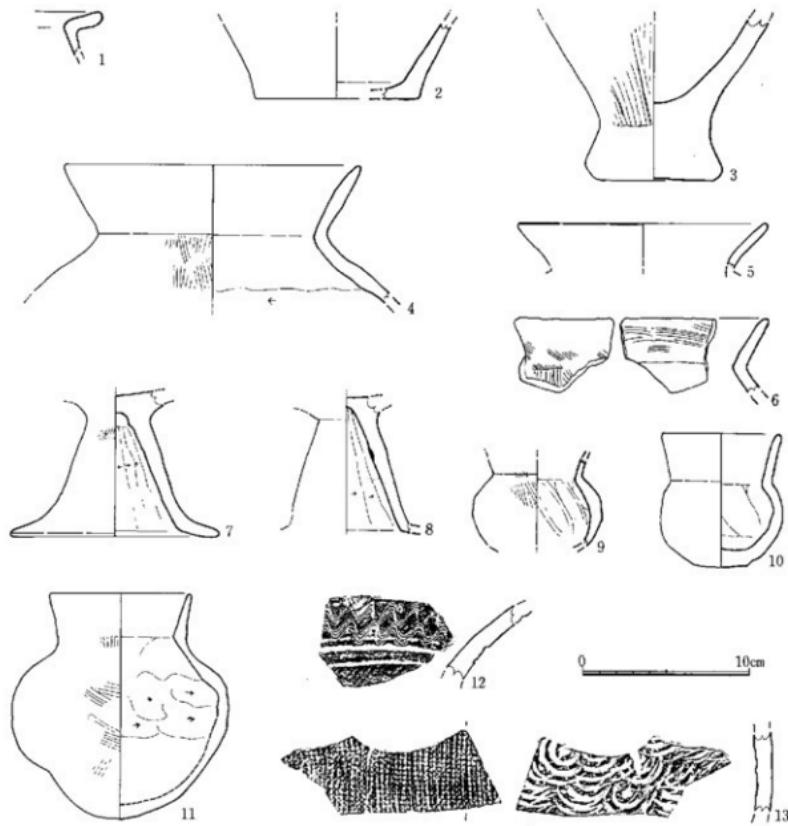


Fig. 5 SD-03出土遺物実測図 (1/3)

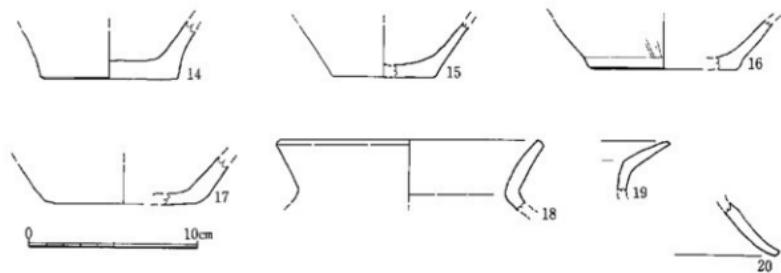


Fig. 6 SD-05出土遺物実測図 (1/3)

3. 古墳時代後期の遺構と遺物

SD-02 Fig. 7、PL. 2

調査区の北西部で検出した、主軸を磁北よりやや西よりにとって南流する小さな溝である。幅0.5m前後、深さ0.3~0.4mで、覆土は下層に粘質土、上層に砂質土が堆積している。

SD-02出土遺物 Fig. 8、PL. 3

弥生土器、土師器が76点、須恵器が1点出土した。21、22は土師器の變形土器である。21は胴部内面ヘラ削り、口縁内外横ナデであるが、胴部外面は器面が剥げて調整は不明。灰褐色~淡橙色を呈し、胎土に砂粒と雲母を少量含み、焼成はやや不良である。復元口径14.5cmを測る。22は胴部内面ヘラ削り、外面刷毛目で、口縁内部にも横位の刷毛目を施す。淡白橙色を呈し、胎土に砂粒・雲母を含み、焼成はやや不良である。復元口径は不正確ながら20cm。23は須恵器變形土器の肩部片である。外面格子叩き、内面同心円文のアテ具痕が残る。淡灰青色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良。

SD-12

調査区西辺の中央部に検出した、西側からSD-02に合流する溝である。ごく一部を検出したのみで、規模はSD-02とはほぼ等しい。

SD-12出土遺物 Fig. 8

土師器9点、須恵器4点が出土した。24は須恵器變形土器の頸部あたりの小片である。口縁内外は横ナデ調整、胴部外面はカキ目の上から格子文様の叩き目が重なり、胴部内面はアテ具痕の上からヘラ削りしている。灰青~赤褐色を呈し、胎土には砂粒を少量含み、焼成はやや不良である。

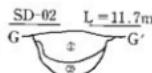
SD-19

調査区中央南東寄りに検出した溝である。SD-03を切るが、調査時には同時に掘り下げてしまった。ほぼ磁北を向き、幅0.7m、深さ0.2mを測り、南端は削平され消失している。

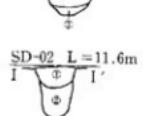
SD-19出土遺物 Fig. 8、PL. 4

弥生土器・土師器34点、須恵器2点が出土した。

25は土師器の高杯である。杯部と脚端部を欠く。器面は剥落しており調整は不明。淡黄色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は良好。26、27は須恵器蓋である。26は天井部に自然釉が被っており、蓋として固化した。口縁のかえりは低く内傾し、端部は丸い。天井部は回転ヘラ切りのまま放置し、ヘラ記号を加える。内面はロクロ整形の後軽いナデを加える。灰青色を呈し、胎土に砂粒を少量含み、焼成は良好である。天井部には厚く自然釉が被り、別個体の一部が融着している。ロクロは逆時計回り。口径11.2cm、器高3.0cm。27は口縁のかえりの形状から蓋と考えられる。天井部は回転ヘラ切りのままで「十」のヘラ記号を施す。内面はロクロの後軽くナデる。淡灰~淡灰青色を呈し、胎土に砂粒を少量含み、焼成はやや不良。ロクロ回転は逆時計回りである。



SD-02土層断面図
①淡褐色砂質土
②褐褐色粘質土
③黒褐色粘質土
④褐褐色粘質土
(黄褐色粘土を含む)



SD-12土層断面図
①淡褐色シルト

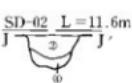


Fig. 7 SD-02・19土層断面図 (1/40)

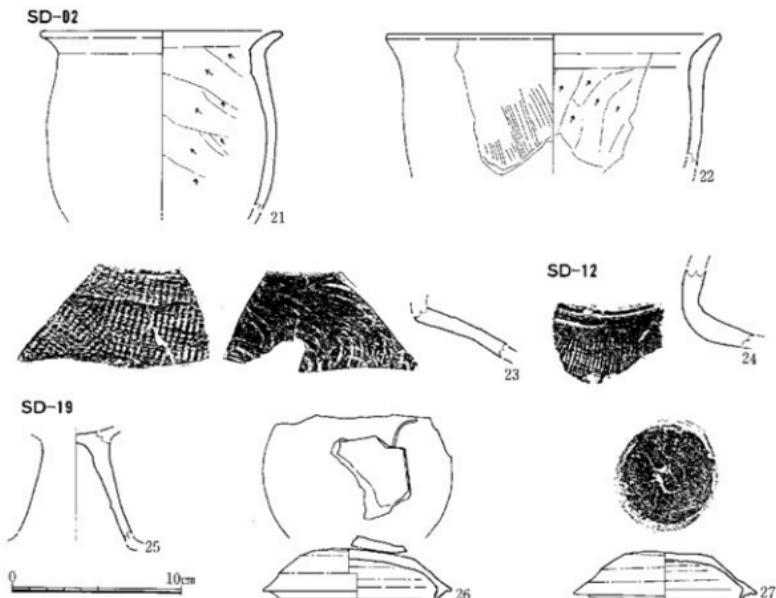


Fig. 8 SD-02・12・19出土遺物実測図 (1/3)

4. 古代・中世の遺構と遺物

(1)掘立柱建物

SB-30 Fig. 9, PL. 2

調査区北西隅に検出した掘立柱建物で、ごく一部を検出したのみである。調査区内で南北1間、東西2間を数えるが、東側1間は柱間が狭く、廂であろう。南北の柱間は198cm、東西の柱間は東から146cm、187cmを測る。主軸方位はN-19°-Wにとる。柱穴掘り方は円形プランで、径50~85cm、深さは30~46cmを測る。一部の柱穴には他のピットとの切り合いが見られる。6本の柱穴の内5本に柱底跡が認められ、更にうち4本には柱根が残っていたが、柱根は木材の芯を残すのみであった。柱穴掘り方からは柱根以外には何らの遺物も出土しなかったが、覆土の状況や周辺遺跡の調査状況から見て、時期的には古代のなかに収まるのではないかと考えられる。

(2)溝・河川

SD-10

調査区南端で一部を検出した中世の古河川である。規模は不明で、西流する。調査地の南を流れる那珂古川の旧流路と見られる。覆土はすべて砂ないしシルトである。湧水が著しく、ごく一部を掘り下げたに留まつた。北岸に沿つて護岸用の杭が打たれている。

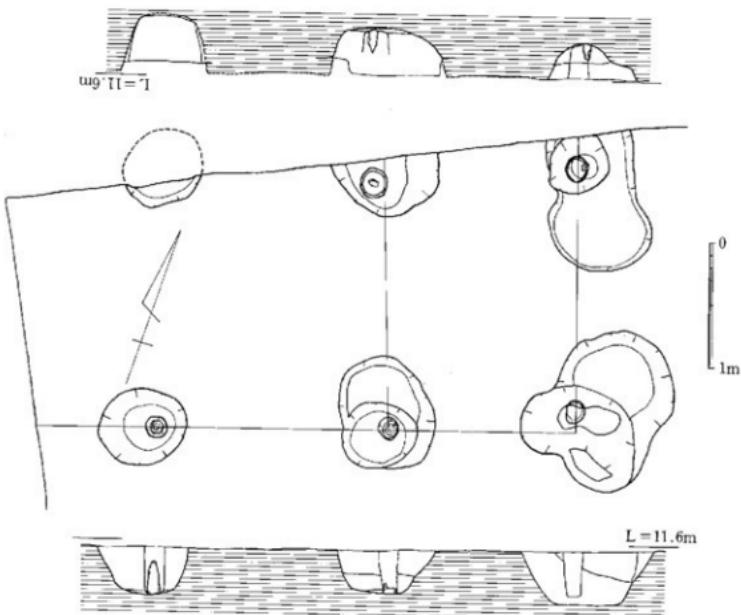


Fig. 9 SB-30実測図 (1/40)

SD-10出土遺物 Fig.10, PL. 4

弥生土器・土師器が396点、須恵器が103点、陶磁器が5点出土している。

28は須恵器蓋坏である。肩部には沈線が巡り、口縁端部内面には段がある。クロ回転は上から見て時計まわりで天井部外面には回転ヘラ削りを加える。灰青～淡灰青色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良である。復元口径11.6cm、器高は3cm前後か。29～32は土師器の小皿及び坏で、底部には回転糸切りの痕を留める。29は黒褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は不良、復元口径は10.2cm、器高1.3cm、底径8.2cmを測る。30は灰褐～淡灰褐色を呈し、胎土は精良で雲母を含み、焼成はやや不良、復元底径は9.5cm。31は淡黄褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好、復元底径は10.1cm。32は淡灰褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好、復元底径は9.5cmである。33は土師器の椀の底部で、高台が付く。磨滅して調整不明。淡黄褐色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好、復元底径は6.7cmである。34は須恵器坏で、底部には外寄りに輪高台を貼付する。淡灰青色を呈し、胎土は精良で、焼成は良好。高台の径は9.4cmに復元される。35は白磁の椀である。見込みに圓線を巡らせ、外面はヘラ削りし、高台を削り出す。乳白色の胎土に白色の釉をかけ、体部下端から外底にかけては露胎である。高台径は6.5cmに復元される。36～38は龍泉窯系の青磁椀である。36は体部外面に鏽連弁文を施し、胎土は淡灰緑色、釉は緑色で前面施釉し、貫入が著しい。37は体部外面を縦にヘラ削りする。胎土は緑味のかかった淡灰色で、釉は緑色で貫入はなく、高台盤から外底は露胎である。38は見込みに方形の刻印があり、「口玉堂」か。淡灰色の胎土に緑色の釉をかけ、疊付から内側は露胎である。

41、42は木簡である。41は頸部を圭頭状に作り出し、下端は意図的に切断されている。片面に僅か

に墨痕が認められるが、文字は判読できない。42は上半部と下端部の一部を欠損している。墨痕は認められない。

SD-23、24

調査区の南東隅に検出した、SD-10に流れ込む自然流路の一部で、SD-23がSD-24を切っている。遺構の覆土は砂ないしシルトである。

SD-23、24出土遺物 Fig.10, PL. 4

39はSD-24から出土した弥生土器の小型甌である。胴部はやや肩の張る器形で、口縁は屈曲して短く開き、底部は平底である。口縁内外は横ナデ、肩部は外面刷毛目、内面は上半がナデ、下半がヘラ調整で、口縁屈曲部内面を指で押さえる。底部はナデ調整である。淡灰褐色を呈し、胎土に砂粒を多量に含み、焼成は不良で、胴部下半に黒斑がある。復元口径13.0cm、器高13.3cm、底径8.0cmを測る。40はSD-23から出土した鋤錐形の土錐である。黒褐～灰褐色を呈し、胎土に砂粒を少量含み、焼成は良い。

SD-10

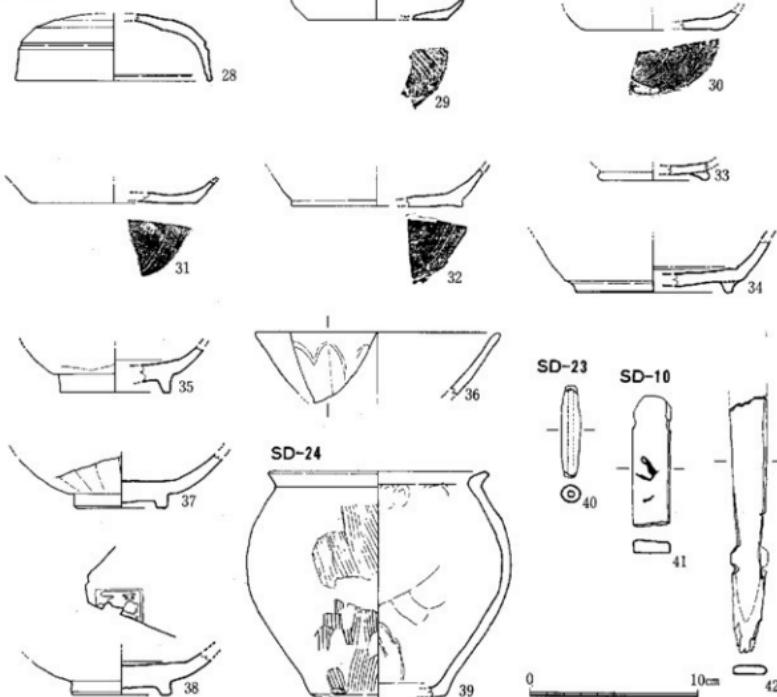


Fig. 10 SD-10・23・24出土遺物実測図 (1/3)

(3) 土坑

SK-08 Fig.11

調査区中央の西寄りに検出した土坑である。中央を擾乱溝に切られる。西に開く長方形プランを呈し、 $6.4\text{m} \times 3.5\text{m}$ を測る。土坑底面が歎状に波うっており、粘土の探掘坑と考えられる。古代の遺構であろう。

SK-08出土遺物 Fig.12、

PL.4

土師器55点、須恵器14点が出土した。43は須恵器環である。ロクロ整形の後内底をナデ調整し、外底はヘラ切りで

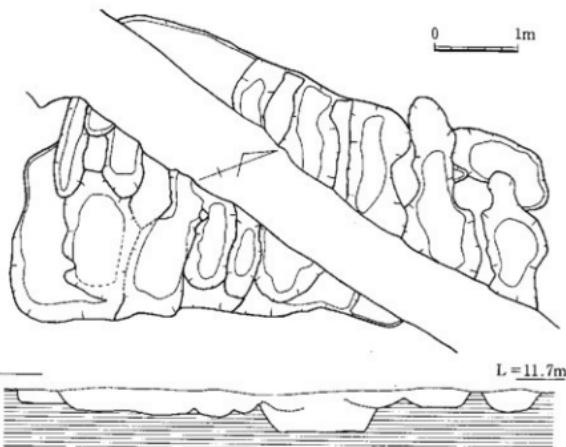


Fig.11 SK-08実測図 (1/60)

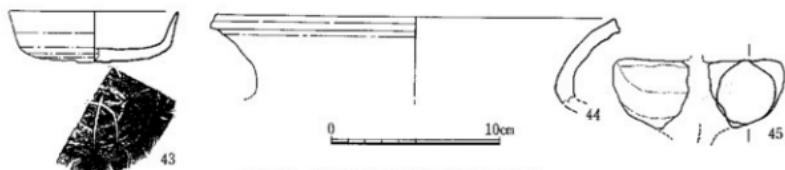


Fig.12 SK-08出土遺物実測図 (1/3)

ヘラ記号を加える。外面灰青色、内面赤褐色を呈し、胎土に砂粒を少量含み、焼成は不良。復元口径10cm、器高3.0cm。44は須恵器縁の口縁部片で、淡灰青～灰青色を呈し、胎土は精良で、焼成はやや不良。復元口径は24.4cm。45は土師器の把手である。白橙色を呈し、細砂粒を少量含み、焼成は不良である。

IV. 小結

今回の調査で検出された遺構から、当地区は古墳時代には水田、古代には集落の一部、中世には再び水田として利用を受けていたことが明らかとなった。これまでの井相田C遺跡や仲島遺跡の既往の調査によると、古墳時代の遺構としては、仲島遺跡で溝を中心とした遺構が検出され、井相田C遺跡3次調査では集落跡が確認されており、集落とそれを取り巻く水田跡の存在が明らかとなっている。古代の遺構としては1、2次調査で公的な性格を持つと想定される集落が見られる反面、仲島遺跡では井戸などは見られるものの、掘立柱建物等の集落遺構は検出されず、両者の遺跡の性格の違いが注意されている。当5次調査地点は両者の中間にあり、掘立柱建物の一部を確認したが、古代の集落はこれより以東へ伸びないものと思われ、5次調査地点付近が集落の境界にあたっている可能性が強い。

PLATES
(図 版)



1. 井相田C遺跡第5次調査区全景（南から）



2. 井相田C遺跡第5次調査区全景（西から）

PL. 2



1. SD-03 (北西から)



2. SD-05 (北西から)



3. SD-02 (北から)



4. SD-02 (南から)



5. SD-02 (南東から)

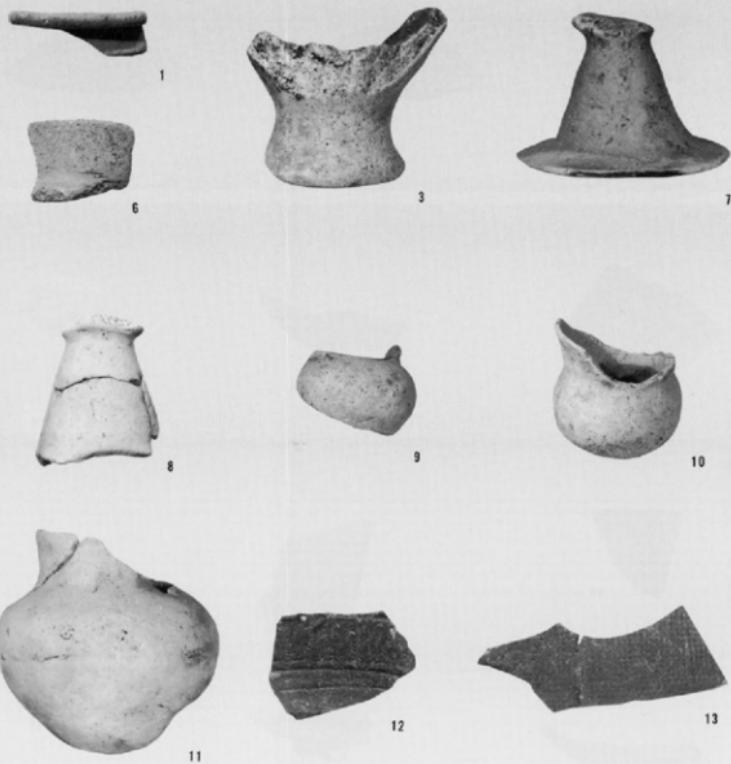


6. SB-30 (南東から)



7. SB-30 (南から)

SD-03



SD-02



井相田C遺跡第5次調査出土遺物・I

PL. 4

SD-19



25



26



27

SD-10



28



34



35



36



38



40



37

SK-08



43



44



45

井相田C遺跡第5次調査出土遺物・II

高畠遺跡第14次調査の記録

I. はじめに

1. 調査にいたる経過

1993年11月2日、中牟田君代氏から本市に対して博多区板付5丁目8-4における共同住宅構築に伴う埋蔵文化財課事前審査願書が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財課であるところの高畠遺跡群の北端に位置し、申請地の東側近接地には第7次調査地が位置している。福岡市教育委員会埋蔵文化財課が、これを受けて1993年10月13日に試掘調査を実施した。現況は水田で、調査の結果、耕作土直下の地山鳥栖ローム層上面で遺構が確認された。かなりの削平を受けており、八女粘土との境に近い。申請者と埋蔵文化財課は文化財保護に関する協議をもったが、申請面積400m²を対象にやむを得ず記録保存のための発掘調査を行うこととなった。施工業者である中村建設株式会社と福岡市との間に発掘調査および資料整理に関する受託契約を締結し、調査は年度末も差し迫った翌1994年3月14日から3月31日まで行われた。

2. 調査の組織

調査委託 中村建設

調査主体 福岡市教育委員会埋蔵文化財課

調査総括 埋蔵文化財課長 折尾 學（前任） 荒巻輝勝
第2係長 山崎純男（前任） 山口讓治

庶務担当 吉田麻由美（前任） 西田結香

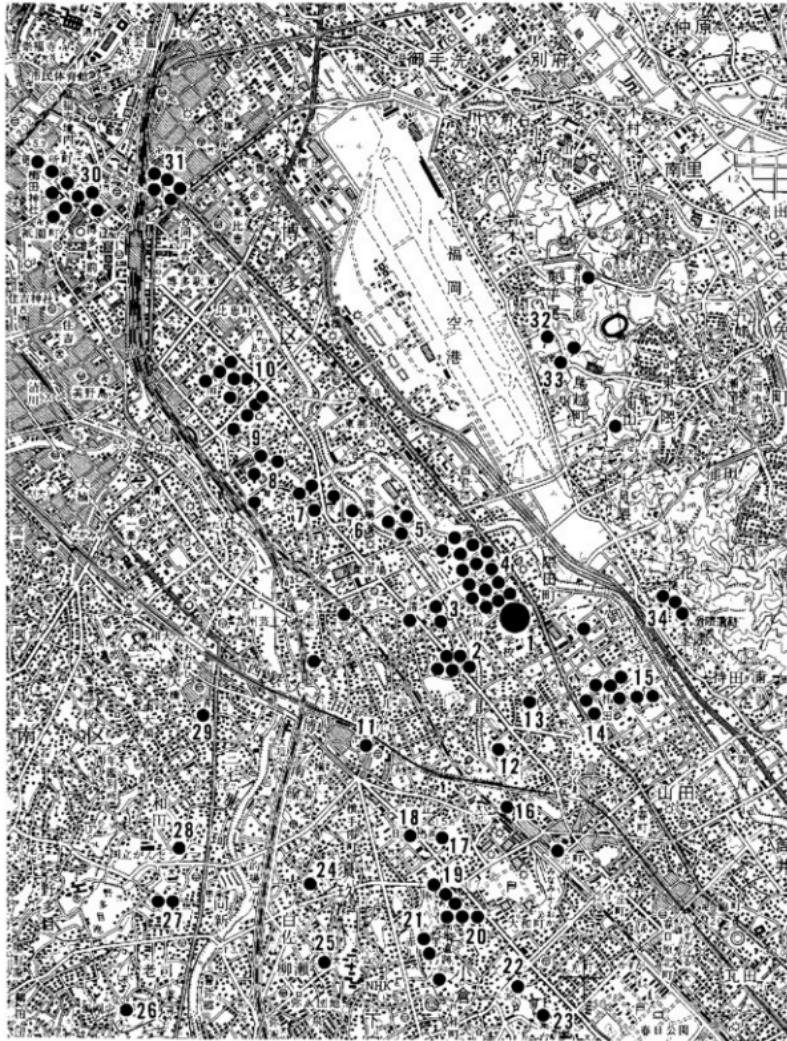
調査担当 試掘調査 普波正人
発掘調査 佐藤一郎

発掘調査・資料整理協力者 石屋四一、尾花憲吾、乙部武彦、小林義徳、関義種、高木啓太、中村米重、村岡義浩、今泉博子、内山マサ子、江越初代、岡本妙子、桑原美津子、関加代子、曾根崎昭子、高塚智江、高手与志子、那波幸子、西田幸子、野口リュウ子、播磨博子、平田こずえ、福田友子、船越エミ子、星子輝美、前田千栄子、山口慶子、相川和子、齊田紀代実、千住香織、田中ヤス子、藤野邦子、藤野佳公恵

その他、発掘調査に至るまでの諸々の条件整備、調査中の調整等について地主の中牟田君代氏、施工の中村建設株式会社をはじめとする皆様には多大なご理解とご協力をいただき、調査が円滑に進行し無事終了することができました。ここに深く感謝します。

II. 遺跡の位置と環境

那珂遺跡群は福岡平野を貫流する御笠川と那珂川に挟まれた洪積台地、中位段丘上の北側に位置する。その範囲は南北700m、東西200mである。以前は18mあまりの高まりがみられた中位段丘であったが、標高は12m前後にまで削平を受けている。高畠遺跡群が位置する台地はその南東の春日丘陵か



- | | | | |
|------------|------------|-------------|------------|
| 1. 高畠遺跡 | 10. 比恵遺跡群 | 19. 須玖岡本遺跡 | 28. 野多日遺跡 |
| 2. 諸岡遺跡 | 11. 井尻B遺跡 | 20. 岡本四丁目遺跡 | 29. 三宅寺 |
| 3. 諸岡館址遺跡群 | 12. 三筑遺跡 | 21. 赤井手遺跡 | 30. 博多遺跡群 |
| 4. 板付遺跡 | 13. 麦野遺跡 | 22. 伯玄社遺跡 | 31. 堅柏遺跡群 |
| 5. 那珂君休遺跡 | 14. 井相田C遺跡 | 23. 西平塚遺跡 | 32. 赤穂ヶ浦遺跡 |
| 6. 那珂深ヲサ遺跡 | 15. 仲島遺跡 | 24. 丹佐遺跡 | 33. 宝満尾遺跡 |
| 7. 那珂八幡古墳 | 16. 南八幡遺跡群 | 25. 猪水原遺跡 | 34. 金隈遺跡 |
| 8. 那珂遺跡群 | 17. 永田遺跡 | 26. 老司古墳 | |
| 9. 刺冢古墳 | 18. 唐梨遺跡 | 27. 野多日社渡遺跡 | |

Fig.13 遺跡の位置と周辺の遺跡

ら標高を北に下げながら延びる低丘陵に立地する。北側の台地上に位置する板付遺跡との間を旧河川が横断し、台地は連続しない。春日丘陵からベルト状に延びる丘陵群には「奴国」の拠点とされる遺跡群が分布している地域である。最北端の台地状に位置する比恵遺跡群では6世紀後半代の大型倉庫群、建物、櫓が検出され、536（宣化元）年に設けられた「那津官家」に関連する遺構と推定されている。那珂遺跡群ではそれに続く時期からその後8世紀前半に至るまでの正方位主軸をとる溝、大型建物が検出されているが、建物群の配置をつかむまでにはいたっていない。6世紀末から7世紀初頭にかけての古い時期の瓦の出土例もあり、「那津官家」もしくはその後身に関連する官衙的な施設、あるいは郡衙が営まれていたと考えられている。高畠遺跡では台地北縁部での第4・7次調査では8～9世紀の溝、瓦礫が出土した土壤が検出されている。台地東縁部での第8次調査では木簡や大量の墨書き土器、瓦礫が出土した溝が検出されている（註1）。木簡には凶作に伴う米の下行に関する記載や「匁升」や「匁石」など穀物の数料をあらわしたものとみられるものがみられる。墨書き土器では高畠遺跡が所在する旧那珂郡域の郷名「板計」、「板刈」に通じるものであろう「板」、郡名の那珂に通じるものであろう「中」、「中村」、「奴」、「匁都」と記されたものがみられる。溝の埋没時期は出土した土師器、輸入陶磁器からみて9世紀中葉～10世紀頃と推測され、台地にかけて存在した機関の創建年代は8世紀中葉を測る可能性を報告者は述べている。高畠遺跡が形成された台地は1940年頃に工場建設によって大きく削平されたが、その際多くの礎石とみられる大石が動かされたと伝えられ、寺院もしくは官衙に相当する施設の存在が明らかになった。先に述べた瓦礫、文字史料に加え、「寺」と記された墨書き土器が出土したことなどから寺院と断定する意見が大勢であるが、莊藏に関する遺物が全く出土していないこと、寺院遺跡ではあまり出土しない舟形、鳥形、斎車、陽物形木製品などの木製祭祀遺物、人面墨書き土器が出土していることから寺院遺跡としての確証はなく、官衙遺跡として再考の余地がある。微税に関する記載や郡名、郷名がみられる文字史料から8世紀中葉から10世紀にかけての「那珂郡衙」とする方が妥当と考えている。那珂郡衙推定地として北へ1.5kmの那珂遺跡群（博多区那珂）がその第一候補にあげられているが、50次をこえる那珂遺跡群の発掘調査では先の述べたように8世紀前半に至るまでの正方位に主軸をとる溝、大型建物が検出されているが、今まで8世紀中葉を下る時期のものは検出されていない（註3～4）。那珂遺跡群内に置かれていた那珂郡衙が8世紀中葉に高畠遺跡内へ移転したのではないかと考えている。

註

- 註1 福岡市教育委員会『板付周辺遺跡調査報告書(9)－1982年度調査概要－』1983
註2 福岡市教育委員会『那珂遺跡4－那珂遺跡群第23次調査の報告－』1992
註3 福岡市教育委員会『那珂5－第10～12・14・16・17・21次調査報告』1992
註4 福岡市教育委員会『那珂遺跡8－那珂遺跡群第20次調査の報告－』1993



Fig.14 高畠遺跡および周辺遺跡調査地点位置図

III. 発掘調査の概要

高畠遺跡第14次調査区は高は体積の北端部分に位置し、標高9mを測る。第7次調査区の西側に位置する。現況は水田であった。

調査は1994年3月14日にバックホーによる表土剥ぎから始め、堆土は調査区の南側の水田に仮置きした。遺構面は耕作土直下の鳥栖ローム層上面で検出した。先述のとおり調査区域の全域は後世に削平を受けており、八女粘土との境に近い。3月14日から作業員を投入し、遺構の検出にかかる。検出された遺構は8～9世紀の溝2条、およびそれ以前の旧河川である。調査区の南端から南北に延び屈曲して東側に延びるSD01溝は第7次調査で検出されたSD03溝の延長部である。3月26日に全景写真的撮影をおこない、3月30日で遺構実測を終了、3月31日に機材を撤収し、調査は終了した。

IV. 遺構と遺物

1. 検出遺構

溝 (Fig.17 PL. 5・6)

SD01 調査区の南端から南北に屈曲して東側に延びる。幅1.8～2.7m、深さ50cmを測る。第7次調査で検出されたSD03溝の延長部である。

SD07 調査区の南端で検出した。幅1.9～2.1m、深さ60cmを測る。調査区域内では延長7.5m検出した。

SD08 調査区の南端SD07の西側で検出した。幅1.4～1.6m、深さ50cmを測る。調査区域内では延長7m検出した。

SD10 調査区の南端でSD07の北端に接して検出した。幅0.7～1.1m、深さ25cmを測る。延長4mを検出した。溝の中央でやや東に屈曲する。

SD11 調査区の南端でSD07の北端1mで検出した断面「V」字形を呈する溝である。SD07と方位を同じくする。幅0.8～2.4m、深さ50cmを測る。延長18m検出した。溝の北端で端に屈曲する。

SD07から瓦・磚片 (PL. 6) が出でしている他は、SD07・08・10・11の時期を示す遺物の出土はない。いずれも主たる埋土を同じくすることから、遺構の時期は奈良～平安時代とみられ。第7次調査で検出された東西方向にのびるSD03溝が折れて南北方向にのびた延長部分と考えられよう。寺院もししくは官衙に相当する施設の外郭を区画する溝と考えられる。区画の溝については現在までの調査では、その規模等不明な点が多く推測の域を出ない。今後の調査成果の蓄積を待って、再考すべき課題である。

2. 出土遺物

溝・旧河川出土土器 (Fig.18 PL. 6)

弥生土器 1～3がSD03、4がSD01、5～8はSD19からの出土である。

甕 (1～4) 1の口縁は「く」字状で、水平をなし、屈曲部内面の棱は不明瞭である。焼成は良

好で、色調は黄灰色を呈する。外面は煤が付着し、剥離した部分が多い。調整は口縁部が横ナデ、胴部外面は細かい刷毛目、内面はナデを施す。口径21.5cm、器高21.8cm、底径6.5cmを測る。2の口縁も「く」字状であるが、口縁部は内傾し、屈曲部内面は棱をなす。胴部下半以下は欠失している。焼成は良好で、黄灰色を呈し、外面には煤が付着している。口縁部が横ナデ、胴部外面は細かい刷毛目、内面はナデを施す。口径25.4cmを測る。3は逆「し」字状を呈する口縁部を持つ。内端部はつまみ出されたように突出している。胴部下半以下は欠失している。焼成は良好で、明赤褐色を呈し、外面には煤が付着している。口縁部が横ナデ、胴部外面は細かい刷毛目、内面はナデを施す。口径27.4cmを測る。4は口縁部から胴部上半の破片資料で、逆「L」字状を呈する口縁部を持つ。口縁部上面はほぼ平坦となっており、口縁外端部が窪み口唇状をなす。口縁直下に断面口唇状の突帯をめぐらす。口縁部上面から胴部にかけてヘラ磨きが施され、丹が塗布されている。内面は横ナデが施されている。焼成は良好で、胎土は淡黄褐色を呈する。復元口径39.4cmを測る。

壺（5～7）5は外傾する鋸先上口縁をもつ口縁部である。内外面の調整は横ナデで、外面に丹が塗布されている。焼成は良好で、胎土は淡赤褐色を呈する。復元口径20.0cmを測る。6は蓋付の小型の壺である。口縁部に紐を通すために、向い合った2ヵ所に2個ずつ穿孔している。口縁部から胴部外面上半にかけて横方向のヘラ磨き、下半は縱方向のヘラ磨き、内面はナデを施す。口縁部の屈曲部から胴部外面にかけて丹が塗布されている。焼成は良好で、胎土は淡黄灰色を呈する。口径13.8cm、器高11.0cm、底径6.7cmを測る。7は6の蓋にあたり、器周残1/6からの復元である。残存する部分には穿孔はみられなかった。天井部に平坦面を持つ。口縁部外面は縱方向のヘラ磨き、天井部および内面はナデを施す。外面は丹が塗布されている。焼成は良好で、胎土は淡黄褐色～淡黄灰色を呈する。復元口径13.4cm、器高2.2cmを測る。

鉢（8）口縁部が横ナデ、外面は刷毛目、内面はナデを施す。焼成は良好で、胎土は淡黄褐色を呈する。口径20.2cm、器高6.4cmを測る。

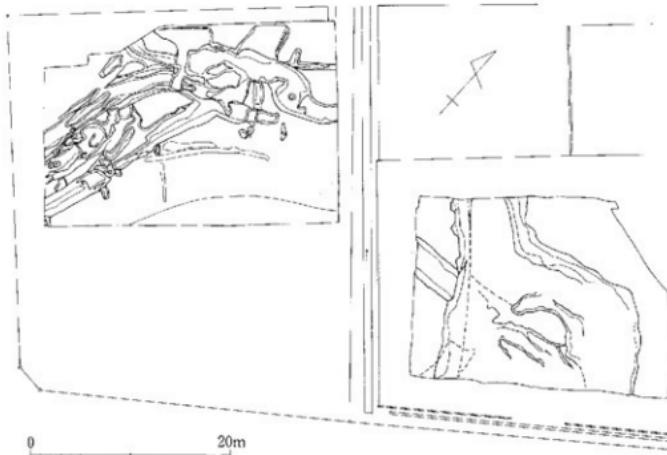


Fig.15 高畠遺跡第14次調査周辺地形図(1/500)

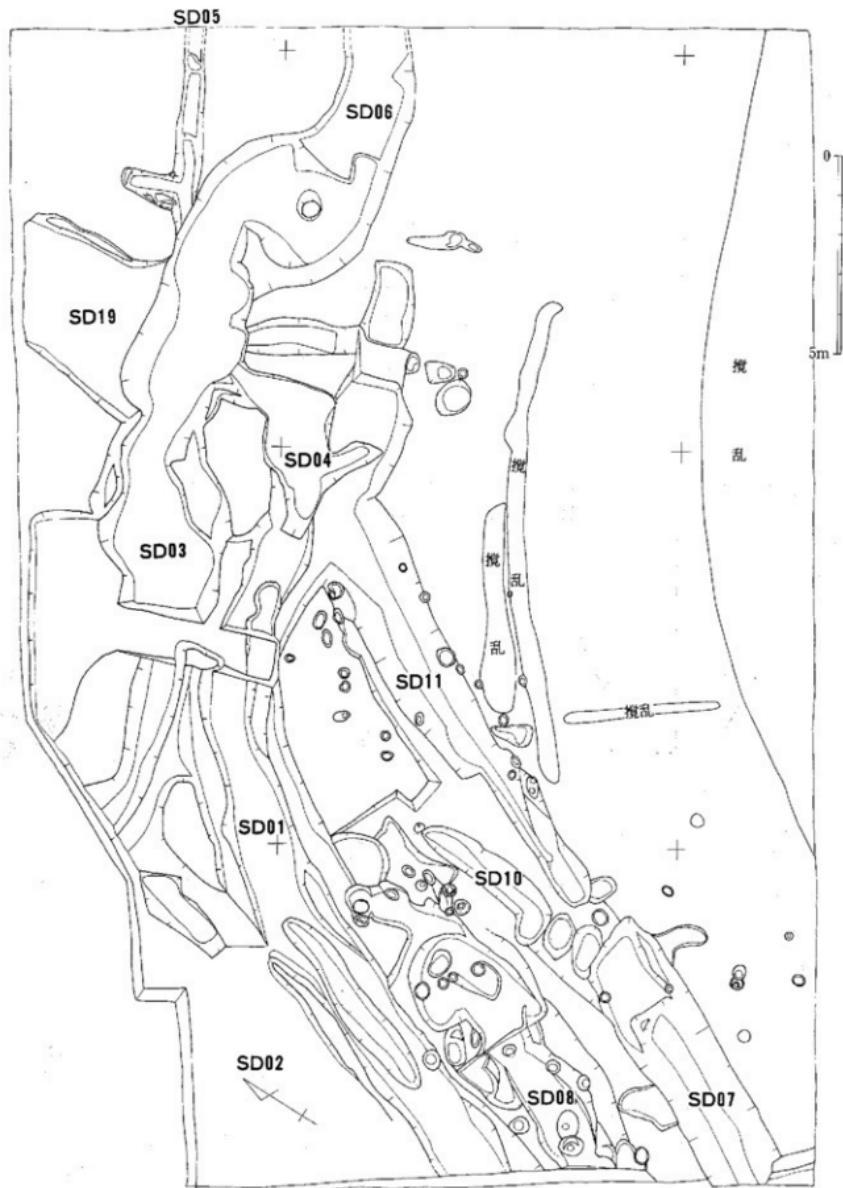


Fig.16 高圧送電線第14次調査構造配置図(1/125)

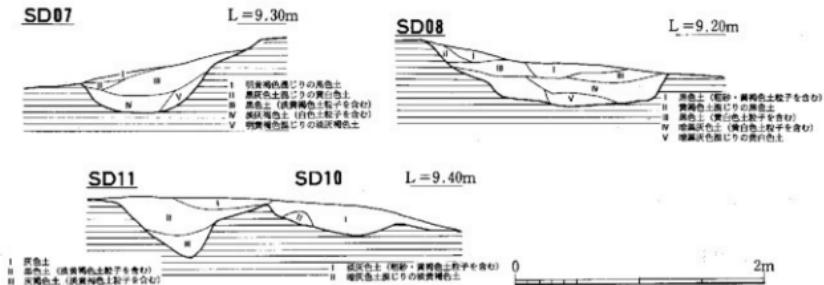


Fig.17 溝土層断面実測図(1/4)

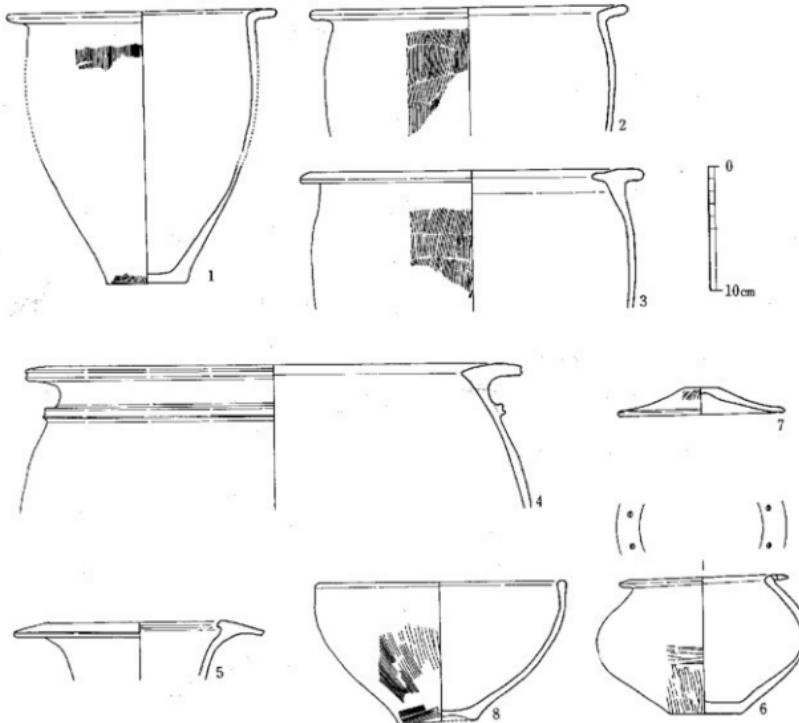
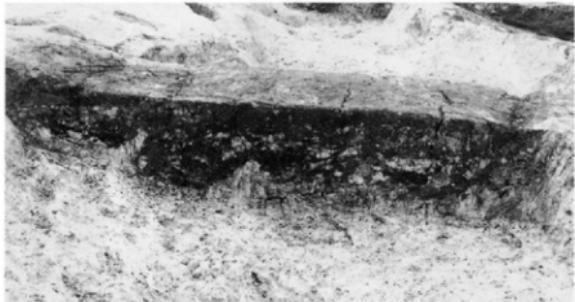


Fig.18 出土遺物実測図(1/4)

PLATES
(図 版)



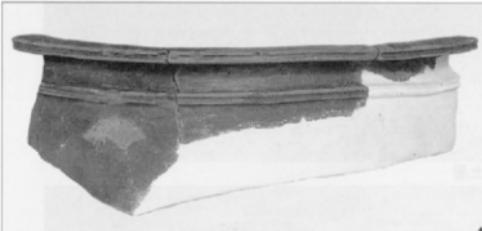
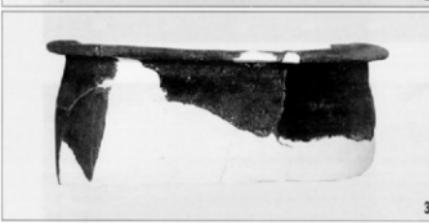
(1) 高畠遺跡第14次調査全景（南から）



(2) SD10・11溝土層



(3) SD08溝土層（東から）



(2) 出土遺物

福岡市
井相田C遺跡 第5次
高畠遺跡 第14次

福岡市埋蔵文化財調査報告書第458集

1996. 3. 31

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8-1

印刷 今井印刷株式会社
福岡市中央区赤坂1-2-18
